

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：10103
 研究種目：基盤研究(B)
 研究期間：2012～2014
 課題番号：24320143
 研究課題名(和文) 1920年代から1930年代中国周縁エスニシティの民族覚醒と教育に関する比較研究

 研究課題名(英文) A Comparative Study on the Ethnic Awakening in the China's Peripheral Areas during 1920s and 1930s

 研究代表者
 松本 ますみ (MATSUMOTO, Masumi)

 室蘭工業大学・工学(系)研究科(研究院)・教授

 研究者番号：30308564

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は中国の周縁エスニシティの20世紀前半覚醒運動の比較を行った。いずれも近代教育とメディアの発達が大きなき影響を与えていたことが明らかになった。1)回民は中東・インド発のイスラーム覚醒の影響を強く受け、ムスリム意識・近代教育・メディア発行熱、国民意識が高まったが、その結果ペルシャ語を使う伝統的経堂教育が斜陽に向かったこと。2)独立を画策していたモンゴル人は日本式の軍事教育を受けそれを逆利用して民族運動への情熱を燃やしたこと。3)朝鮮人は韓国式の教育を中国東北部において展開し、反日意識を高めることで民族意識を高揚させたこと。4)西南諸民族エリートは旧来の土司制度を利用して権利要求を行ったこと。

研究成果の概要(英文)：This study examined ethnic awakenings of the periphery ethnicities of China. We clarified how the modern education and the development of media gave impacts to ethnic awakenings in the first half of the twentieth century. Sino-Muslims strengthened Muslim awareness and national identity by the promotion of modern education and the publication of ethnic media. Consequently, traditional madrasa education with Persian knowledge became disappeared. Mongolians under Japan's occupation took advantage of Japanese military education and training, which gave them hopes to build their own country, independent from Japan, China and Russia. Koreans strengthened national consciousness by education conducted by anti-Japanese Korean teachers in Northeast China. Ethnic elites of the Southwest tried to ask for their own ethnic rights. They were descendants of traditional tusi or hereditary headmen and modern Chinese governments including the Republican regime and the Communist regime also made use of the system.

研究分野：東アジア近現代史

キーワード：エスニシティ 民族教育 メディア ジェンダー 軍事主義 ナショナリズム 公教育

1. 研究開始当初の背景

(1)研究代表者、松本ますみは、過去 20 年あまり中国国民統合、特に少数民族政策の理論的研究と、分離主義を主張しない現在の回族と朝鮮族の近代における歴史と現状に関して個別研究を行ってきた。その過程で、彼らのエスニック・アイデンティティの出発点として 1920 年代から 1930 年代の日本以外の東アジアにおける活字メディアや独自民族教育の発展・発達に注目するようになった。

(2)また、アメリカ文学研究者、イギリス文学研究者、独文学研究者、文化人類学者、日本近代ジェンダー史研究者、東アジア近代メディア論研究者らとともに、10 年以上にわたって第二次世界大戦参戦国のメディア（特に大衆向けグラフ誌面）において女性がどのように表象されてきたのかに関して比較研究を行ってきた。

(3)そのような研究の過程において、特に、漢字を共通とする中国の周縁のエスニシティ（モンゴル人、朝鮮人、回民＝現在の回族、苗＝現在の苗族）などが「自分たちは「民族」である」という自覚をどのように持つようになったのか、さらにはその「民族」言説の中のジェンダーに関する言説を比較検討すること、特に、マイノリティが他者によって表象されることがそのような民族自覚とどのようなかわりがあるのか、を考えることが重要であると考えようとした。それこそが、21 世紀に入ってなお強まる東アジアのナショナリズムや中国の民族問題を解きあかす鍵なのでは、と考えるようになった。

2. 研究の目的

中国周縁エスニシティ（モンゴル人、回民、朝鮮人、西南諸民族）が 1912 年の清国滅亡後、いかに独自「民族意識」をもつようになったのかの覚醒過程を、雑誌メディアの言説と教育の内容を比較検討して明らかにする。特に、二つの世界大戦の戦間期の 1920 年代から 1930 年代の状況分析に重点を置く。この時代、強力な国家体制の欠如により中国はかえって比較的自由的な言論環境にあり、なおかつ印刷・活字メディアが識字率の上昇と郵便制度の発達により隆盛を極めつつあったからである。

3. 研究の方法

歴史学的な文献学的方法論（マイクロフィルム資料、档案資料調査も含む）、文化人類学的方法論（インフォーマントへのインタビュー、言説研究）、表象文化研究の方法論をとった。年に 2 回の研究会に加え、最終年度には国際シンポジウムを開催した。

4. 研究成果

(1)モンゴル人の民族覚醒の過程に関しては以下の通りである。「満洲国」におけるモンゴル人向けの学校教育、特に近代軍事教育が大きな役割を果たした。内モンゴル地域のモンゴル人は、外モンゴルと統一し、農耕民たる漢人の土地の浸食をうけない国家建設を夢想していた。日本側は防共の砦としてのモンゴル人とモンゴルの土地を考えてモンゴル人に軍事教育を行ったのが、その意に反してモンゴル人は手に入れた近代軍事技術、知識、合理的思考、日本語識字能力を使って、漢人からもロシアからも自由な体制を構築しようとしていた。いずれにしても、民族自決原則と日本語による近代教育が民族覚醒に大きな影響を与えた。

(2)回民（現在の回族）の民族覚醒に関しては、「近代性の追求」というキーワードの下に以下の通りまとめられる。

回民は、宗教実践や風習・慣習のみにて漢人と区別されると考えられてきた。本研究では、ハラールには近代になって衛生学的な根拠がある、とされ漢人の食生活よりも優越性があると説明されたということを示した。

「合理的」で「近代的」なアラビア語・漢語の双語教育を行って世界の中のムスリムの一員、中華民国の国民として覚醒せよ、政治的文化的権利を主張せよと宣伝したイスラーム近代主義者の働きが 1920 年代から 30 年代に強まった。この動きは結果的に数百年にわたったペルシア語学習伝統をほぼ廃絶に導いた。イスラーム近代主義者は引き換えに漢人に「回民」としての中国における政治的・文化的権利を認めさせようとした。日中戦争中の日本軍による華北占領時期、日本軍部にイスラーム知識が欠如していたためペルシア語学習は存続した。日本軍敗戦後、その学統が山東、河北で細々と続いたが、文化大革命でほぼ根絶やしにされた。わずかに天津付近の三つの村に残るのみとなったことを明らかにした。

日本占領下、北京の回民女性むけに経営した「新月女学」はほとんど民族覚醒につながらなかったことが明らかになった。女学は、小学校卒業生対象に日本式良妻賢母教育カリキュラムを擁していたが、「知識人」女性には全くアピールせず、女性を通じた親日派養成は失敗に終わった。また、一般の回民女性は小学校も出ていないので、ニーズも少なかった。

(3)朝鮮人の民族覚醒に関しては、モンゴル人とは異なる方向性があったことが明らかになった。すなわち、中国東北の間島において、日本による韓半島統治から逃れてきた韓国人による学校が数多く開かれた。特に、1911 年、新興軍官学校が開かれ、学校が抗日闘争の基地となる。1920 年に廃校となったこの学校は、のちの独立志士たちを多く輩出した。しかし、民族独立をめざした試みは路線の違いという点で統一点をみず、一旦は失敗

を余儀なくされた。(1)のモンゴル人のための軍官学校とは性格は異なるが、しかし、民族覚醒が「武力」をもつ民族エリート男性の主導であったという意味では同様である。軍事力の保持とそれを圧迫するものの存在が民族覚醒をもたらすという仮説は、中国周縁エスニシティについても同様に起こった、ということが明らかになった。

(4)西南では清朝まで羈縻政策が実施されていた。国民党政府は西南の世襲実力者、土司を使い統治に利用しようとした。また、共産党は長征通過中に藏族の自治政権博巴政権をつくり「民族自決」につとめた。その一方で藏族と食糧をめぐって軋轢を起こしたことがある。また、共産党はこの西南に長期間滞留せず、少数民族工作は不得手であった。彼らが中国から「独立」せず、中国内に留まる決定のために鄧小平が1949年9月に出した「少数民族工作に関する指示(草案)」は、失敗しかかった民族政策を立て直し、教育ある土司の末裔を積極的に民族幹部として登用していこうとする意欲的なものであった。すなわち、民族覚醒は、自発的なものは一部あったとしても、上からの工作で作られていたことが明らかになった。

以上のことから、次のことが明らかになった。すなわち、中国国内にとどまっている「少数民族」であっても、「近代化」「合理化」というキーワードは共通しているものの、民族覚醒のありようは「独立」「軍事闘争」という観点からすれば共通点はなく、おのおのが対中国(=漢人を中心とした国家)では共闘関係を結ぶべく覚醒するということがなかった。西南民族や回民は「覚醒」しても、あくまでも中国内部に留まることを望んだのである。それは、漢人との入り組んだ関係という歴史的要因、独自言語の汎用性等に起因するものであった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 11 件)

1. 松本 ますみ「モンゴル人と「回民」像を写真で記録するということ 「華北交通写真」からみる日本占領地の「近代」」『アジア研究別冊』(査読無) No.3, 27-54, 2015, DOI: <http://doi.org/10.14945/0008105>

2. 松本 ますみ「中国イスラーム教育におけるペルシア語学習の排除 近代化と「合理化」の果てに」『1920年代から1930年代中国周縁エスニシティの民族覚醒と教育に関する比較研究 研究成果報告書』No.1, (査読無) 2015, 29-59, DOI: <http://hdl.handle.net/10258/3790>

3. 吉開 将人「中国民族史像と考古・歴史ナシ

ヨナリズム」『歴史と地理』No. 649, (査読有) 2015, 1-14. URL なし

4. 新保 敦子「日本軍占領下の北京における少数民族と女子中等教育 実践女子中学に焦点をあてて」『1920年代から1930年代中国周縁エスニシティの民族覚醒と教育に関する比較研究 研究成果報告書』No.1, (査読無) 2015, 60-74. URL なし

5. Shimbo Atsuko, "Life Style Transformation and Cultural Tradition Associated with Modern School Education", *Islam and Multiculturalism Coexistence and Symbiosis for Islamic Area Studies*, Waseda University, No.1, (査読無) 2014, 77-84. URL なし

6. 吉開 将人「「羈縻政策」と20世紀中国第二野戦軍「關於少数民族工作的指示(草案)」からみた西南民族エリート問題」『1920年代から1930年代中国周縁エスニシティの民族覚醒と教育に関する比較研究 研究成果報告書』(査読無)No.1, 2015, 91-117, DOI: <http://hdl.handle.net/10258/3792>

7. 権 寧俊「20世紀初の中国東北地方における「朝鮮独立基地建設運動」と新興武官学校」『1920年代から1930年代中国周縁エスニシティの民族覚醒と教育に関する比較研究 研究成果報告書』(査読無)No.1, 2015, 74-90, DOI: <http://hdl.handle.net/10258/37921>

8. 新保 敦子「子どもの貧困と対抗戦略に関する国際比較研究」『早稲田教育評論』(査読有) No.21, 2014, 1-20. http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/41381/1/WasedaKyoikuHyoron_28_1_Kobayashi.pdf

9. Shimbo Atsuko, "Analysis of the education and social mobility: Based on study of the Hui Muslim family in China", 『学術研究』(査読無)No.62, 2014, 1-7. URL なし

10. 新保 敦子「公教育と多文化教育 近代中国におけるエスニック・マイノリティに焦点を当てて」『日本の教育史学』(査読有) No.56, 2013, 131-136. http://ci.nii.ac.jp/els/110009662537.pdf?id=ART0010139267&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1433843437&cp=

11. 新保 敦子「現代中国英語教育と教育差 距：關於少数民族地区小学英语教育必修化」『日本現代中国研究』2012(日本人間文化研究機構、当代中国地区研究)(査読有) No.1,

2013、183-196。URL なし

〔学会発表〕(計 22 件)

1 . Masumi Matsumoto, “Islamic Education for Women in China, Vocational or Ethnical Training?” *The Third International Symposium of Inter-Asia Research Networks*, February 28 -March 1, 2015, Toyo-Bunko, Bunkyo-ku, Tokyo.

2 . 松本 ますみ「モンゴル人と「回民」像を写真で記録するということ - 「華北交通写真」からみる日本占領地の「近代」」、国際シンポジウム「交感するアジアと日本」2015年2月27日、静岡大学、静岡県静岡市。

3 . 権寧俊「20世紀初の中国東北地方における朝鮮人社会と新興武官学校」『国際シンポジウム 20世紀初、中国周縁エスニシティの覚醒に関する比較研究 メディア、移動、政策 - 』2014年12月20日、早稲田大学国際会議場、東京都新宿区。

4 . 楊 海英「モンゴル騎馬兵に関する日本語の軍歌」『国際シンポジウム 20世紀初、中国周縁エスニシティの覚醒に関する比較研究 メディア、移動、政策 - 』2014年12月20日、早稲田大学国際会議場、東京都新宿区。

5 . 吉開 将人「「羈縻」政策と20世紀中国 - 第二野軍「關於少数民族工作指示草案」から見た西南民族エリート問題」『国際シンポジウム 20世紀初、中国周縁エスニシティの覚醒に関する比較研究 メディア、移動、政策 - 』2014年12月20日、早稲田大学国際会議場、東京都新宿区。

6 . 海野 (山崎) 典子 「清らかなイスラム: 20世紀初頭の華北地域におけるムスリムのハラール意識と「民族」観」『国際シンポジウム 20世紀初、中国周縁エスニシティの覚醒に関する比較研究 メディア、移動、政策 - 』2014年12月20日、早稲田大学国際会議場、東京都新宿区。

7 . Ma Haiyun, “The Middle East and the Middle Kingdom: the decline of the Ottoman Empire and its impact on Chinese Muslims in the early 20th century.” 『国際シンポジウム 20世紀初、中国周縁エスニシティの覚醒に関する比較研究 メディア、移動、政策 - 』2014年12月20日、早稲田大学国際会議場、東京都新宿区。

8 . Matsumoto, Masumi, “Images of Muslims in North China and Inner Mongolia on the Kahoku Kotsu Photo

Collection”. *International Forum on Hui-Muslims during 1920s and 1940s: Focusing on Oral History*, December 19, 2014, Waseda University International Conference Hall, Shinjuku-ku, Tokyo.

9 . Matsumoto Masumi, “The New Returnees: The Changing Dynamics of Hui Society in China” *International Conference of Modern China in Contemporary Contexts 1600- Present*, August 11-13, 2014, Academia Sinica, Taipei (Taiwan).

10 Matsumoto Masumi, “An Overview on Christian-Muslim Relations in China”, *East Asia Division of Christian-Muslim Relationship 1900*, Committee of Christian-Muslim Relationship, July 8, 2014, Melbourne (Australia).

11. Shimbo Atsuko, “Life Style Transformation and Cultural Tradition Associated with Modern School Education -With a focus on Hui Female Teachers in China” *Islam and Multi-culturalism: Coexistence and Symbiosis*, December 20, 2013, Waseda University, Shinjuku-ku, Tokyo.

12 . 新保 敦子「青少年校外活動的課題和展望」『中・日・台社会教育交流研究会』2013年11月1日、台湾師範大学、台北市(台湾)。

13. 松本 ますみ(真澄)「日本の伊斯蘭研究史概観」『首届内科大 早稲田大学伊斯蘭地域研究暨内蒙古回族文化教育論壇』2013年9月10日、内蒙古科技大学、包頭市(中国)。

14 . 松本 ますみ(真澄)「1920年代 30年代日本改宗穆斯林亜州主義者在中国的活動和中国伊斯蘭覚醒」『首届内科大 早稲田大学伊斯蘭地域研究暨内蒙古回族文化教育論壇』2013年9月9日、内蒙古科技大学、包頭市(中国)。

15 . 新保 敦子「蒙疆政權下伊斯蘭教徒工作与教育 以善隣回民女塾为中心」『首届内科大 早稲田大学伊斯蘭地域研究暨内蒙古回族文化教育論壇』2013年9月9日、内蒙古科技大学、包頭市(中国)。

16 . 新保 敦子「教育におけるジェンダー平等 中国ムスリムに焦点を当てて」『日本教育史学会大会』2013年9月2日、東京学芸大学、東京都小金井市。

17 . 権 寧俊「中国朝鮮族社会における『グローバル化』と言語教育に関する考察」『第三回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム』、2013年8月21日、延辺大学、延吉

市(中国)

18. 新保 敦子「日本高齢者学習の現状及課題 従克服代溝的視角出發」『友善楽齡・幸福台中 2013 年高齢学習与楽活国際研討会』2013 年 6 月 5 日、朝陽科技大学、台中市(台湾)。

19. 松本 ますみ「中国イスラーム経堂教育の「凋落」と天津周辺における「保存」: 近代主義者、「保守主義者」と日本占領下の華北の対回教政策」ミニシンポジウム『中国周縁エスニシティの民族覚醒と教育に関する比較研究』2013 年 5 月 25 日、北海道大学、北海道札幌市。

20. 権 寧俊「1910 年代の中国東北地方における朝鮮人社会と新興軍官学校」ミニシンポジウム『中国周縁エスニシティの民族覚醒と教育に関する比較研究』2013 年 5 月 25 日、北海道大学、北海道札幌市。

21. 吉開 将人「福音主義と 20 世紀中国の民族史論」ミニシンポジウム『中国周縁エスニシティの民族覚醒と教育に関する比較研究』2013 年 5 月 25 日、北海道大学、北海道札幌市。

22. Matsumoto Masumi. "Why was Persian Learning Excluded?: Secularization and Modernization of Islam in China", Session 164, *Annual Meeting of Association for Asian Studies*, March 23, 2013, at Manchester Grand Hyatt, San Diego, CA, U.S..

〔図書〕(計 13 件)

1. 松本 ますみ、勉誠出版『周縁を生きる中国少数民族』、2015 年 7 月刊行予定。

2. 権 寧俊編、創土社、『歴史・文化からみる東アジア共同体』2015 年、3 - 13, 181 - 218。

3. 楊 海英編、風響社、『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料 7 - 民族自決と民族問題』(内モンゴルの文化大革命 7) 2015 年、1233 頁。

4. 松本 ますみ編、創土社、『中国・朝鮮族と回族の過去と現在』2014 年、267 頁。

5. 楊 海英編、名古屋大学文学研究科比較人文学研究室、『中央ユーラシアにおける牧畜文明の変遷と社会主義』(アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書 8) 2014 年、207 頁。

6. 楊 海英、勉誠出版、『ジェノサイドと文

化大革命: 内モンゴルの民族問題』2014 年、482 頁。

7. 楊 海英、文藝春秋、『チベットに舞う日本刀 モンゴル騎兵の現代史』2014 年、414 頁。

8. 楊 海英編、風響社、『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料 6 - 被害者報告書(2)』(内モンゴルの文化大革命 6) 2014 年、全 676 頁。

9. 新保 敦子編、国際書院、『中国エスニック・マイノリティの家族』2014 年、全 284 頁。

10. 新保 敦子、学文社、『若者の教育と貧困』、2014 年、84 頁。

11. 楊 海英、岩波書店、『中国とモンゴルのはざままで ウランフーの実らなかった民族自決の夢』2013 年、全 280 頁、

12. 楊 海英、勉誠出版、『植民地としてのモンゴル 中国の革命思想と官制ナショナリズム』全 2013、256 頁。

13. 中国ムスリム研究会編、(共著・松本 ますみ主編、澤井充生、木村自、高橋健太郎、新免康、清水由里子、楊 海英、新保 敦子) 明石書店『中国のムスリムを知るための 60 章』、18-29, 36-40, 61-63, 168-172, 203-207, 238-247, 287-291, 2012 年。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本ますみ (MATSUMOTO Masumi)
室蘭工業大学・工学研究科・教授
研究者番号: 30308564

(2) 研究分担者

権 寧俊 (KWEON Yongjun)
新潟県立大学・国際地域学部・准教授
研究者番号: 20413172

大野 旭 (OHNO Akira) (楊 海英) 静岡
岡大学・人文社会科学部・教授
研究者番号: 40278651

吉開 将人 (YOSHIKAI Masato)
北海道大学・文学研究科・准教授
研究者番号: 80272491

小林 (新保) 敦子 (KOBAYASHI
(SHIMBO) Atsuko)
早稲田大学・教育総合科学学術院・教授
研究者番号: 90195769

(3) 研究協力者

海野(山崎) 典子 (UNNO (YAMAZAKI)
Noriko) (東京大学大学院)

MA Haiyun (Frostburg State
University, US)